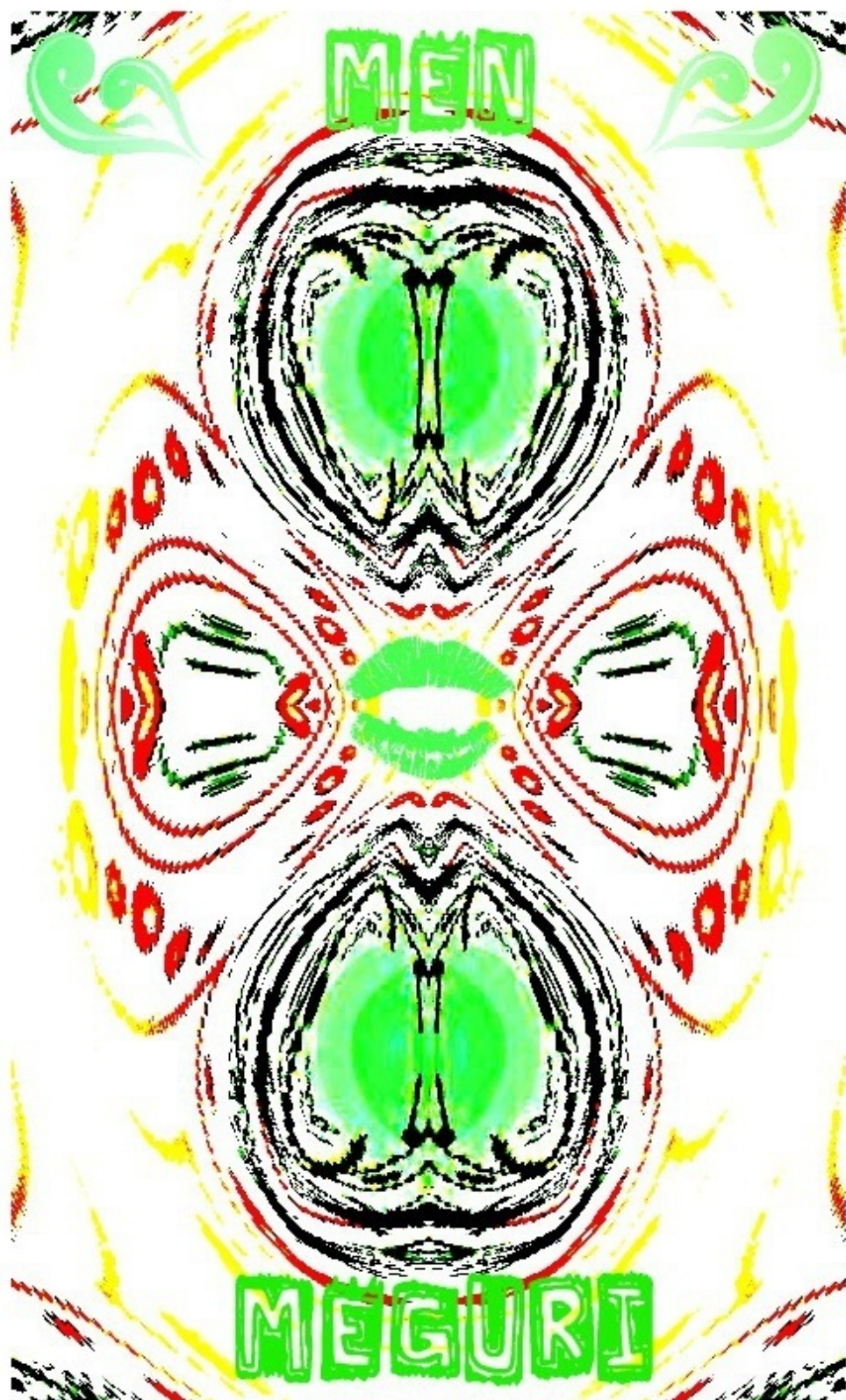


麵巡り



mikatuki98

これまでの人生で出逢った美味しいラーメンが、俺に永遠の幻想を抱かせる。
店主は髭面の男で若過ぎず年より過ぎず働き盛りと言ったところ。
ラーメンの美味さが人格をも引き立てるかのような感覚だった。
しかし美味さと商売繁盛は、必ずしも比例するとは限らない。
寂れて行く小さな町の常連客は、横柄な態度でたむろするタクシー運転手たち。
偶にふっと気が向いて暖簾をくぐる通りがかりの営業マン。
そして俺はめったに訪れないこの町では見掛けない人間。

1年ぶりに訪れた時には、店はたたまれていた。
「遂にココもつぶれたか……」
俺が美味しいと思う店は何故かつぶれる。
美味しいのだから味のせいではない。
大抵は立地条件の悪さが悲劇を招く。
「それとも俺の味覚がおかしいのか？ まさかな」

それからと言うもの、新たに訪れた町でラーメン屋を見掛けると必ず試食のつもりで食ってみる。

そこは開店したばかりのようで、店内は新しい雰囲気だが客もまだ居ない。
注文したラーメンを食う様子を店主がじっと見ているような気配を感じながら、俺はスープを一口飲んだ。

『……味が無い』
次に麺を一箸口にいれてみた。
『……不味い』
お互いが何の助けにもなっていないスープと麺の関係。
どちらも不味ければ、全体として不味いと言えようがない。
気弱な俺は途中で箸を置くことも出来ず、麺だけをかろうじて食って無言で店を出た。

無名店の発掘に疲れた俺はある時、有名店に入った。
地元の間人なら名前だけは誰でも知っているだろう。
ラーメン好きなら一度は食っている筈。
ところが俺の麺運も尽きかけていたのか、店に到着して随分と時間の経ったであろうその麺は、腐敗が始まりかけていた。
細麺硬麺が売りのその店の麺も、長く待たされれば伸びてくる。
待ちくたびれたその麺は、まさにくたびれ果てたような歯触りで全く持って不味かった。

その後も俺は再起を図り麺巡りを繰り返したが、大抵がスープが麺の邪魔をしている。
哀れ、麺は生気を失くし、俺にその苦しみを訴え来る姿を何度目の当たりにしたことか。

その度にラーメンに挑む俺の心が萎えて行った。

「すまん。俺はお前たちをすくってはやれん。救うことも出来なければ、掬うことも出来ない。俺にはもう麺をすすりる資格はないのだ」

思い出しては目を潤ませながら、俺は今、パリパリ麺の皿うどんを食っている。

悲しみの麺巡りの果てにあったのは、野菜と魚介類がトロトロになったスープで安堵している状態の下で、ひっそりと息を潜めている健気な、しかし意志の強いパリパリ麺だった。

「美味しいな…… 美味しいよお前」

いつしか全てが和合してしんなりと身を全体に委ねたパリパリ麺。

俺の口から胃袋へ、そして俺の血肉となり、竟（つい）の果てには俺と共に生きるエネルギーとなった。

嗚呼、感涙！

了